

令和 6 年度

目黒日本大学中学校

入学試験問題

国 語

試験時間 50 分

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全 12 ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄^{らん}に記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者^{かんとくしゃ}に知らせてください。
- 試験終了後、監督者の指示にしたがって問題冊子と解答用紙^{しゅうりょう}を提出してください。
- 問題冊子および解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとします。

受験番号	氏 名

一

次の各問いに答えなさい。

問1

次のぼうせん部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① お時間の都合上、一部説明を割愛させていただきます。
- ② 内省して、自分の悪い部分と向き合う必要がある。
- ③ 痛風にかかっている。

問2

次のぼうせん部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ① セイマイ機を買ったらごはんがおいしくなった。
- ② おミヤゲを買う。
- ③ かつて私は、数学界のシンドウと呼ばれていた。

問3

①・②の□にふさわしい言葉を後から選び、ことわざを完成させなさい。

- ① 先んずれば□を制す

ア 事 イ 物 ウ 人 エ 仏

- ② 三つ子の魂□まで

ア 一 イ 十 ウ 百 エ 千

問 4 次の空らん^①に当てはまる言葉を後から選び、記号で答えなさい。

① 危機^{じき}的な状況^{じょうきょう}に（ ）。

ア いれこむ イ おちいる ウ ひそむ エ はいる

② 先生に自分の意見を（ ）。

ア もうしあげる イ おっしゃる ウ ごらんになる エ さんじようする

問 5 次の文のぼうせん部のうち、意味が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 明日は雪など降るまい。

イ 同じミスは繰^くり返すまい。

ウ ここから逆^{さか}転することはできまい。

エ 宝くじがあたることはあるまい。

二

次の文章は、ユダヤ教の宗教家クシュナー氏に関するものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

クシュナーは、ある日、病院に一人の女性を見舞いに行きました。彼女は飲酒運転の車に追突されるといふ大きな事故にあいながらも、奇跡的に軽い怪我で済んだのです。その時、その女性は「あんな事故にもかかわらずこうして生きていられるなんて、やっぱり神様はいらっしゃるのですね」と言いました。しかし、クシュナーは、そう言った彼女に対して無言で微笑むことしかできなかったといいます。①この時も、彼はそのほんの二週間前に、同じく飲酒運転の犠牲になつて妻と子供を残して死んでしまった若い男性の葬儀を執り行ったばかりだったからです。軽傷で済んだこちらの女性が、神が自分を生かそうと思つたと信じることをとやかく言うことはできません。しかし、それと同じように考えますと、似たような事故で死んでしまった別の人は、神にとつて、助かつたその彼女よりも価値がなかったということになりかねません。②

やはりクシュナーは、病氣も、強盗事件も、地震も、交通事故も、それらはみな神の意志ではなく「神の意志とは別個の現実」③なのだと思ひます。彼によれば、私たち人間の身体は、自然の法則を超えているという意味においては、むしろ自然の法則に正確に従っているという意味で「奇跡」なのだと言います。自然の法則はすべての人間を平等に扱い、その人が善良だからとか、価値があるからといって、特別扱いをしたりしません。だから、彼は「神が災いを引き起こすわけではありませんし、神はそれを防ぐこともできないのです」と述べます。④これは、一神教の宗教家としては思い切つた発言のようにも思われるかもしれませんが、しかし、彼は次のように続けています。「神に氣に入られている特定の人たちだけが自然の法則から除外され、その他の人たちは自分自身でなんとかしなければと汗水を流す、そんな世界が、より良い世界だと言えるでしょうか」。

ユダヤ人であるクシュナーは、アウシュヴィッツも例に出しています。しばしば、アウシュヴィッツに神はいなかったのか、なぜたくさんの老若男女が残酷に殺されていくのを神は黙つて許していたのか、と問われます。それに対してクシュナーは「それは神が引き起こしたことではないのだ、と答えましょう」と言います。彼は、犠牲者たちの涙と祈りが神の深い同情を呼び起こしたとは「信じ」ているが、それでも人間に善と悪の選択と決断の自由を与えた以上、その悲劇を「神は防ぐことができなかった」のだと言います。

同じように、地震も、ハリケーンも「神の行為」ではありません。クシュナーによれば、「神の行為」というのは、災害が過ぎ去つたあとで生活を立て直すとする人々の勇氣のことであり、被災者を助けるために自分にできることをしようと立ち上がる人々のことなのだ、とされます。病氣や犯罪被害などで、苦しみや悲しみにさいなまれている人が「いったい私がどんな悪いことをしたのか」と絶叫するのはわからなくもありません。しかし、それは問いの立て方が間違つていて、私たちが問ひ始めるべきなのは「どうしてこんなことが私に起きるのか」とか「私がいったい何ををしたというのだ」ではなく、「こうなつた今、私はどうすればよいのか」であると彼は述べています。

クシュナーは、自分はいくまでも神を「信じ」ている、と言います。しかし、「私は神の X を認識しています」とも付け加えています。彼の考えは、次の数行に要約されます。

「神は私たちに不幸をもたらしません。不幸は不運な巡りあわせによって、悪人によって、また、自然の法則のなかで生きている死すべき人間として避けることのできない自然の成り行きによってもたらされるのです。私たちにふりかかる痛みの体験は、私たちの誤った行いに対する処罰ではありませんし、神の壮大な計画の一部分などでもありません」

このように考える以上、神に対する「祈り」^⑤という行為についても再考が必要になります。彼によれば、私たちは神に対して、苦難を取り除いてくださいと求めるように祈ることはできないと言います。なぜなら「神にはそのようなことはできないから」です。ただし、勇気を求め、苦難に耐える力を求め、失ったものではなく残されたものに心を留める寛大さを求めることはできる、と言います。神とは、悲惨な出来事を防いでくれないけれども、それを持ち越えるための勇気や忍耐力は与えてくれるのだ、と彼は述べています。災害などを念頭に、クシュナーは次のように言います。「人が身の危険もかえりみずに見知らぬ人を救おうと力を尽くしたり、洪水の引いたあとで自分たちの町を再建しようと決断することこそ神の行為なのです」。

※ 一神教……唯一の神が存在し、その神が全てのものを創造し支配していると信じる宗教。

（石川明人『宗教を「信じる」とはどういうことか』）

問1 ぼうせん部①「無言で微笑むことしかできなかった」とあるが、できなかったのはなぜか。その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 女性の言葉を聞き、死んだ人のことを考えて悲しくなったから。
- イ 女性の言葉に、完全には同意することができなかったから。
- ウ 神の存在は、女性が生きていることの目的にならないから。
- エ 事故にあった女性に対して、優しくふるまってあげたかったから。

問2 ぼうせん部②「それ」とあるが、ここではどのようなことを指すか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 神の起こす奇跡は、どの人にも起こるものではないこと。

イ 自分の人生の価値を、神の価値と同じように考えること。

ウ 人間は神のために生かされていることを、実感すること。

エ 生死等の人間にとって重大なことを、神が決めていること。

問3 ぼうせん部③「神の意志とは別個の現実」とあるが、本文中ではどのようなこととして説明されているか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 身の回りで起こるさまざまな出来事は、人間が神から自立した結果であること。

イ 人間が苦難を乗り越えようとする力は、神から与えられたものではないこと。

ウ 人間は自然法則に従って生きており、その法則は神だけが変えられるということ。

エ 人間にふりかかる悲惨な出来事は、神の意図や目的とは無関係であること。

問4 ぼうせん部④「これは、一神教の宗教家としては思い切った発言のようにも思われるかもしれませんが」とあるが、そのように言えるのはなぜか。次の空らんに入る語として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

一神教の宗教者でありながら 二十字以内 から。

問5 空らん X に入る語として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 行為 イ 計画 ウ 意思 エ 限界

問6 ぼうせん部⑤『祈り』という行為についても再考が必要」とあるが、クシュナーがいう祈りとはどのようなことか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間が自らの困難を乗り越えるために、神から力を与えてもらおうとすること。

イ 災いを避けるのではなく、引き受けようとする時に神の存在が感じられること。

ウ 困難な状況において、何かに頼らず人間だけの力で解決していかうとすること。

エ 辛いことや悲しいことに対して自分の非力さを感じ、神に頼ろうとすること。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

夫（鹿野くん）を事故で失ったわたし（うる波）は、小学生の秋くんの家庭教師のアルバイトをしている。秋くんには、お父さんが作った春くんという兄弟のように親しんでいるロボットがいたが、ある日、秋くんを事故から守るために、春くんはほかの子どもにけがをさせてしまった。そのため春くんはお父さんにすべての機能を停止させられてしまった。

事故から一ヶ月後の水曜日、わたしは黄色い熊のキーホルダーを二つお見舞いに用意して仁礼家を訪ねた。けれどキーホルダーのひとつは無駄になった。

「夫がハルの機能を停止させたんです」

秋くんを守るために春くんが他の子を突き飛ばし、結果として突き飛ばされた子が怪我を負ったという事実、開発者であるお父さんはAIの暴走を危惧したのだという。鹿野くんが言ったように、人命を守るというプログラミングはしてあるけれど、秋くんを最優先で守るなどというプログラミングはしていなかった。

「わたしも実は冗談で頼んだことがあったんですけど、それは開発者の資質に関わる問題だつて怒られてしまいました。言われてみれば納得でした」

人工知能の開発は人類の未来と切り離せない分野であり、だからこそ開発には細心の注意が払われるのだという。開発者の個人的な価値観や思想を組み込むことは許されず、将来高度な知能を持つロボットを個人が所有する時代がきたとしても、初期プログラミングだけはいじれないようガードする。アメリカの最先端の研究所では、万が一人工知能が暴走したときのための自動停止プログラムを開発しているらしい。

暴走という言葉聞いて、少し考えてしまった。

いざというとき、誰よりもまず一番に我が子を守る。人間の親ならごく当たり前の行為を、ロボットがすると暴走と定義される。ロボットのプログラミングに当たるものが人間の道義心だとするなら、命は平等に助けるべきとなる。わかっているのに、そうできない感情という名の非合理性。自分たちには許すことを人工知能には許さない。命に近いものを作りながら、自分たちと同じ権利は与えない。都合よくのみ使おうとする。

それは奴隷とどう違うのだろう。

わたしたちは、それほど偉い生き物なのだろうか。

「秋が泣いてお願いしたんですけど、これだけは夫も譲^{ゆず}らなくて……」

どうか話を聞いてやってくださいと言われ、秋くんの部屋へ行った。

お母さんから聞いた通り、機能を停止された春くんは子供部屋の椅子^{いす}に静かに置かれていた。炎^{ほのお}で溶^とけた樹脂^{じゆし}プラスチックのボディの下から機械の塊^{かたまり}が見えている。以前からロボットだったのに、今の春くんは本当のロボットになってしまったように感じた。

秋くんはいつも二人で座っていた空色のソファにひとりで座っている。春くんはいないのに、右側を空けて座っているのが痛々しい。親友を失った秋くんの気持ちを思うと、大人であるはずの自分の中になんの力もないことを思い知る。

「秋くん、久しぶり。身体の具合はどう？」

声をかけると、秋くんは伏^ふせていた目を上げた。

「今日はなにをしようか。絵を描^かいてもいいし、なにもしなくてもいいよ」

秋くんは考えるように、椅子に座ったまま動かない春くんを見つめた。

「うる波さん」

はっとした。「ウル波サン」ではなく、「うる波さん」。

いつものたどたどしい話しかたではない。

「ABCDEの五人の命を助ケル代わりニ、Fの命を捧^{ささ}げよと言ワレタラどうすル？」

前にも聞かれた質問だった。そして以前と完全に話しかたが変わったわけではないこともわかった。長いセ[※]ンテンスを話すと、ところどころぎこちなくなる。

「僕^{ぼく}、その答えが出たンダ」

「秋くんはもう答えを出してたんじゃないの？」

問うと、うん、と秋くんはうなずいた。

「一より五が多い。両方大事なら、数が多いほうを優先スルの八当たり前ナノニ、どうしてみんな答えられナイノカ不思議だった。賢^{かしこ}い春くんまで

『考え中』なんて」

秋くんはじつと春くんを見つめたまま話す。

「花火大会のあと、お父サンが春くんの機能を停止させた。やめてって泣いてお願いしたのに駄目だった。いつもスゴク優しいのに、あんな怖^{こわ}いお

父さん初めて見た。春クンハ僕を助けてクレタのに、それがいけないコトだってお父さんは言う」

「秋くん、それは――」

「わかってるよ。春クンはプログラミング通りに動かナカッタんだ。それも一番狂^{くる}っちゃいけないところが狂^{くる}っちゃったんだ。それは駄目なんだ。ロボットだから……」

秋くんはふいにうなだれ、半ズボンの膝^{ひざ}に視線を落とした。

「わかってるケド僕、ご飯が食ベラレナクなった。お風呂^{ふろ}に入^いったり服を着替^きエルことも面倒^{めんどろ}になった。どうしてご飯を食ベタリ、お風呂に入ラナクチャいけないんだろうって、どうして今までそういうことを普通^{ふつ}にできタンドロウって、僕、わかラナクなった」

「……うん。秋^④くんの言^いいたいことわかるよ」

すると秋くんが顔を上げた。

「本当にワカるの？」

わずかに怒^{いか}りのこもった問いかただった。

わたしは、多分とうなずいた。

「わたしの旦那^{だんな}さん、三年前に事故で死^しんだの」

そう言うと、空気が抜^ぬけるように秋^⑤くんの表情がしぼんだ。

「だから秋くんの気持ちは、全部とは言わないけど、わかる部分がある。わたしは鹿野くんが死んだあと、朝、起きた瞬間に殺されたように感じてた」

秋くんの表情がどんどんゆるみ、目に涙^{なみだ}の薄^{うす}い膜^{まく}が張^はっていく。

「……うん。目が覚メルトと、どうして起キチャッタダろうって不思議にナル」

「一生わかりたくない気持ちよね」

秋くんは目元をこすり、こくりとうなずいた。

「でもお父さんが、新しい春くんを作ロウカッテ言^いってクレタんだ」

「え？」

それはどうなんだろうと思った。

「いないッテ答えたよ」

秋くんは立ち上がり、春くんのそばに歩いていった。

「本当ハ少シ迷ったんだ。僕は春くんガ大好きで、すぐく春くんと話シタクテ、だからうんって言イカケた。でも、やっぱり、それは、春クンじゃナインダ」

秋くんは床にひざまずき、椅子に座って動かない春くんを見上げた。

「僕の好きな春クンは、この春クンで、誰も代ワリニはなれないんだよ」

小学生には重すぎる悲しみに埋め尽くされた横顔に、わたしはなにも言ッてあげられなかつた。^⑥
誰かが代わりになれるなら、これほどまで胸は痛まない。

「だから五人の命とひとりの命と、どっちを優先スルカッて質問に意味はないッてわカッタんだ。引き換えにするFが春クンなら、僕は百人ガ相手でも譲らない。春クンが僕を守ッテクレタみたいに、僕も絶対に春クンを守る」

秋くんは、熱で変形した春くんの手にそつと自分の手を重ねた。

「でも、お医者さんはそう思ワナカッタみたいだ」

「お医者さん？」

「ご飯を食ベラレルように、ヨク眠れるように、話をスルお医者さん」

事故の怪我だけじゃない、強いシヨックを受けると心にも傷が残る。秋くんに将来PTSDの症状[※]が出ないよう、両親が心配していることがうかがえた。

「間違ッてるッて言われたの？」

「ううん。お医者さんは怒ラナイし、僕がなにを言ッても駄目ッて言ワない。でも『引き換えにするFが春クンなら、僕は百人ガ相手でも譲らない』ッて言ッたとき、僕をジツト見た。コノ子は大丈夫^{だいじょうぶ}カナッて心配スル目だつた。ワカルんだ。今まで春くんと仲良クスる僕を、そういう目で見える大人はタクサンいたから」

秋くんは春くんに「ね？」と問いかけた。

「お医者サンは優しく聞いてキタよ。『春くんに突き飛ばサレタ子は火傷をしたケド、そのコトについてどう思う？』ッて。僕はちよつと嫌な気分になつた」

確かに、それは脅^{おど}しみたい^⑦に聞こえた。

（風良ゆう『神様のビオトープ』）

※プログラミング……コンピュータのプログラムを作成すること。

※定義……それぞれの言葉に対する決まりを作ること。

※非合理……論理や道理に合わないこと。

※センテンス……文。あるまとまった内容を表現し、言い切りとなるもの。

※PTSD……心的外傷後ストレス障害。

問1 ぼうせん部①「初期プログラミング」とあるが、本文中から読み取れる春くんの「初期プログラミング」はどのようなものか。最もふさわし

いものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人の命はつねに平等にあつかうというもの。

イ いつでも秋くんを最優先で守るというもの。

ウ 危険なときに人の身代わりになるというもの。

エ 暴走したときには自動停止するというもの。

問2 ぼうせん部②「本当のロボットになってしまったように感じた」とあるが、そのように感じた理由を「感情」という言葉を使って三十字以内で答えなさい。

問3 ぼうせん部③「――」とあるが、「私(うる波)」が言いかけた言葉とそれを言わなかった理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「プログラミング通りに動かなかったからよ」と言ってしまうと、余計に秋くんを苦しめてしまうと思ひ言えなかった。

イ 「春くんがロボットだからよ」と言ってしまうと、春くんが存在する意味を否定することになると思ひ言えなかった。

ウ 「お父さんはあなたのことだけでも守りたいからよ」と言ってしまうと、春くんに対して申し訳ないと思ひ言えなかった。

エ 「ロボットらしく振る舞わなかったからよ」と言ってしまうと、秋くん自身にもあてはまる発言となると思ひ言えなかった。

問4 ぼうせん部④「秋くんの言いたいことわかるよ」とあるが、どのようなことがわかるのか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号

で答えなさい。

ア 現状に対して怒りを感じ、心の衝動しょうどうが抑えられないということ。

イ 理屈りくつではわかつているものの、納得はできていないということ。

ウ 普段ふだんは意識せずにしていたことが、突然できなくなるということ。

エ 抗議こうぎをしようとしているけれども、やる気が起こらないということ。

問5 ぼうせん部⑤「秋くんの表情がしぼんだ」とあるが、それはなぜか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 春くんを失ってしまった悲しみは誰にもわからないはずだと思っていたけれど、「わたし」が完全に理解してくれていたから。

イ 春くんを悪者にされた怒りをどこにぶつけたらいいかわからずにいたときに、「わたし」がそれを受け止めてくれたから。

ウ 春くんの機能を停止したお父さんへの気持ちと、それをやるせなく思う気持ちが間違いでであると「わたし」に気づかされたから。

エ 春くんを思う気持ちを簡単に分かってもらえるのかと疑ったが、同じような境遇で苦しむ「わたし」がいることを理解したから。

問6 ぼうせん部⑥「わたしはなにも言っただけであげられなかった」とあるが、それはなぜか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答え

なさい。

ア 春くんを失ったことを思いだすと、秋くんの悲しみがより深くなってしまうと思い、気をつかっているから。

イ 春くんが秋くんのことをどれほど大切に思っていたか、「わたし」には想像することしかできないから。

ウ 春くんの代わりになれる人がいれば良いと思うが、そんな存在はどこにもいないと分かっているから。

エ 春くんの代わりが作られることを秋くんに理解してもらうには、もう少し時間がかかると思っているから。

問7 ぼうせん部⑦「それは脅しみたいに聞こえた」とあるが、この言葉を秋くんはどのような意味としてとらえたか。最もふさわしいものを次の

中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 春くんはあくまでロボットであり、突き飛ばされた子と同等の存在として扱^{あつか}ってはいけない。

イ 春くんを守るという考えは否定しないが、自分の気持ちを優先して周りを傷つけてはいけない。

ウ 春くんのことだけ考えていては、今後の社会生活で周りの人とうまく過ごしていけない。

エ 春くんが突き飛ばした子は人間であり、ロボットが人間に暴力をふるうことはいけない。

問8 本文全体を読み、ロボットに感情をもたせることをあなたはどのように思いますか。以下の条件をふまえて書きなさい。

【条件1】 賛成か反対の立場を明確にし、あなたの意見を書くこと。

【条件2】 賛成か反対の立場を選んだ理由を書くこと。

【条件3】 それぞれ解答用紙に合うように書くこと。（一文でなくてよい）

以下余白

